



洪民の家並、杜陵の北五里、風景以外見るべきものなしと啄木は云っている

の葉に初夏の太陽を浴びて、しらじらと光つていました。

「あの柳もだんくんと枯れて死んでいくそうです。鉱毒の濁流に根っこを洗われていいるからです。柳に巢を作っていた小鳥もやはりだんだんに減つてしまつて今ではほとんど影をひそめています」

そんな話のいくつかを聞いていますと、ひとのふるさとのことではありませんが、非常に悲しい気持になりました。

北上川にかかる吊橋におりてみました。鶴飼橋というロマチックな名前です。家に帰つてから改造社の石川啄木全集を開いてみましたら「鶴飼橋に立ちて」という詩を見つけました。啄木に鶴飼橋を聞いてみましょう。彼はその詩の序に次のようにいつておられます。

さんの木を指さしました。「あれが柳です」私は一寸の間キョトンとしていました。恥しいことですが柳は銀座のしだれ柳しか知らなかつたのです。目の下の北上の岸辺の柳は、白つばい緑

せめて「しぶたみ」と墨で鮮やかに書かれた駅でもみてこようと、北上川を渡つて、曳尾沢へと登つていきました。啄木のころ

いう気になつていました。白ペンキの啄木遺跡の導標のいくつかを無視しても帰りました。

「橋はわがふる里洪民の村、北上の流に架したる吊橋なり。岩手山の眺望を以て郷人賞し措かず。春暁夏暮いつをといつとも別ち難き趣あれど、我は殊更に月ある夜を好み、友を訪うてのかへるさなど、幾度かここに低回微吟の興を壇にしけむ。」

私も、ここからみる岩手山が、そして姫神山が一番いい気がつきましたが、それにつけても、こういう美しいふる里にこののできなかつた啄木が、かわいそうでならなくなりました。もちろん彼のすべてを私は肯定するわけではありません。いわば啄木によつて一方的に聞いてきた洪民村で、当時の村人の云い分を聞くすべがありません。それでもなお啄木は哀れにおもえてなりません。北上の岸辺はそんなことを訪う人ごとに訴えているのではないでしょうか。

9

自転車をもととして宝徳寺へ廻つてみました。この寺は啄木の育つた家でした。常光寺は彼にとつて想い出の家ではなかつたようですが、この寺には随分想出も多かつたと思います。

そのかみの神童の名の
かなしさよ

ふるさとに来て泣くはそのこと
そうです。神童といわれた少年の頃は、この宝徳寺ですくすくと育つていたと聞いていますが、こうして啄木が昔神童といわ

れた頃をふりかえるとき、言外に宝徳寺の生活も懐しまれていたのでないでしょうか。

私たちは宝徳寺に入ったとき、その殺風景なことに驚きました。庫裡の修理をしていようでしたが、なにも殺風景だと思わせるのは、立派な杉の木が、随分伐り倒されていたことです。

昔、啄木が東京へ飛び出して病を得たとき、父に迎えにきてもらったことがありません。その時父一頑は旅費にするため、壇家に無断で杉の木を数本切つて売つてしまつたそうです。あの有名な校長排斥の学童ストライキを指導したことも大きな理由には違いありませんが、壇家に無断で木を切つて売つたことも、啄木一家を洪民に安住させない大きな理由であつたと聞いています。

むざんに伐り倒された杉の木は、そんな話をわざわざ思い起させて惨酷でした。

もつとも、啄木が代用教員だつたころの手紙によりますと、前年凶作のため給料も役場から来ないということがあつたそうです。当時は村全体が非常に貧しかつたのは事実のようすし、壇家に無断で木を売つた一頑も余儀なくやつたことも知れませんが、村人も貧しければ殊更に一頑をさがめたかも知れません。

隣の保育園の前を通つて池にゆきました。この池が、昔啄木が遊んだという寺前の池かどうかは、たしかめてみませんでしたが、そのころには洪民をひきあげようと

こんないくつかの歌を想い出しますが、洪民の駅から盛岡までは、陸羽街道をまつく、それこそ逃げるように走つたこと

使用自転車 ロイヤル・ノートン・ク
ラウン。二六吋×一⅜吋ホイール。オ
ールランダー型ハンドル。四六T×F
Vハブギヤ(十八T)

いう気になつていました。白ペンキの啄木遺跡の導標のいくつかを無視しても帰つたくなつていたので。浜民はあまりにも悲し気な表情をしすぎているのです。或いは啄木に同情しすぎたために、そう思えるのかも知れませんが、山が美しければ美しいほど、このだたつびろい道の浜民は妙にちぐはぐな感じかしてくるのをどうしようもありませんでした。

部落のなかで僅かに活気のある水汲場へよつて水筒に水をつめ、手びしやくで一杯の水を飲みました。学童がこんどは群をなして水汲場に來ました。さつきみたときより、もつと活気があつて嬉しかったことです。

10

「浜民村という名はいまではなくなりました。昭和二十九年の町村合併で、玉山村と一緒になつたのですが、そのとき浜民が負けて玉山という名になつてしまつたわけです。」

藤森君はペダルをこぎながらそんな話をしてくれました。

「玉山村じや、東京にいたんでは一体どこなのか見当が付きませんね。私だつたら浜民村にした方がいいと思ふけど、そんな考えにはならなかつたものですかねえ」

「そういう主張もあつたそうですが、どういうわけか玉山村に敵わなかつたらしいです。」

せめて「しづたま」と墨で鮮やかに書かれた駅でもみてこようと、北上川を渡つて、浜民駅へと登つていきました。啄木のころは駅がなく、次の好摩で降りたのですから、浜民は啄木のいうとおり不便なところだつたわけです。駅は姫神山の眺望がよいところでした。駅員に頼んで浜民のスタンプを出してもらい、五万分の一の地図「盛岡」の裏にそれを押ししました。スタンプには啄木歌碑と鶴飼橋と姫神山が刻んでありました。そして「やわらかに柳あおめる北上の岸辺目にみゆ泣けごとくに 啄木」と書いてありました。

いま思い出すままに盛岡の地図を出しましたので裏がえしてみましたら、浜民駅のスタンプは38.6.16と日附が記されていました。

田も畑も売つて酒のみ

ほろびゆくふるさと人に

心寄する日

石をもて追はるることく

ふるさとを出でしかなしみ

消ゆることなし

ふるさとの土をわが踏めば

何がなしに足軽くなり

心重れり

ふるさとの山に向いて

言うことなし

ふるさとの山はありがたきかな

こんないくつかの歌を思い出しますが、浜民の駅から盛岡までは、陸羽街道をまつすぐ、それこそ逃げるように走つたことでした。(おわり)

使用自転車 ローヤル・ノートン・クラウン。二六吋×一〇八吋ホイール。オリジナルランダー型ハンドル。四六T×F Wハブギヤ(十八T)

自転車研究会の発足

自転車業界には、技術関係 販売関係 メーカー関係等のいろいろの団体や組合があり、その各々で種々の研究や意見の交換や懇談がいつも行われているが、それ等のいづれにも関係なく、単に自転車の研究をして見たいと云う事で、この会が生れた。即ちメーカー、団体職員、サイクリング団体等の所属を離れて、会員は凡て個人の資格で、会に出席し意見の交換をする事がこの会の目的で、左の人々が集つて第一回の発企人の形をとり、一月二七日今後の方針を検討した。

入会 申込はサイクル時報社内、自転車研究会
発企人 北原利一、長谷川清、宮田実、佐藤一男、鳥山新一、山本秀男、今井彬彦
尚、第一回会合によつて左の事を決定し二月二七日、第二回会合を開く事になつた。

研究題目 一九六〇年型の自転車はどんな構想になるか
これは、今後の自転車の主流となるべき、ライトロードスター、又ライトツーリストを取り上げ、この車種の研究によつて、合理的な自転車の車種別の本来のあり方を、究明するもので、そのフレーム、部品、附属品等を順次研究して行く。

名称 自転車研究会
会員 資格は問はず、自転車研究に興味と熱意あるもの
事務所 当分の間、サイクル時報社内
事務取扱所を置く

会合 月一回 毎月二七日、末広町久保田鮎店

会費 会合日の食事代の外五〇円程度の通信事務費を徴収

連絡 会員には、議事録を送付する

研究題目2 メーカーとユーザーの意見交換
ユーザーとメーカーの意志の疎通をはかる事によつて、各種のネットワークのあり方等を見出し、その解決については、可能な限りその専門の向に協力を仰ぐ事にある。